

『古代アメリカ』 5,2002,pp.93-94

<コメント>

## 都市が生きられるプロセスであること

—山本匡史氏のコメントを受けて—

岩崎 賢

(筑波大学大学院)

拙稿「テノチティランの死と再生」は2001年の本誌第四号に掲載された。今回は山本匡史氏によって詳細な批評を頂き、発表から一年以上の時間をおいて自らの論文を再び読み返してみた。すると論文執筆時は意識していなかったが、今考えると十分に説明できていなかったと思われるような事柄が存在していることに気づいた。以下、必ずしも評者への応答にはなっていないかもしれないが、思うところを記していくたい。

序の部分で説明している通り拙稿が解明しようとしたことは、簡単に言えば、メシーカ人のテノチティランが、その時間論的側面においていかなる宇宙論的構造を有していたかということであった。これは山本氏が引用するオギュスタン・ベルクの用語で言えば、テノチティランにおける「時間のなかの形」のありようを問題にするということであった。メソアメリカの都市の象徴的空间構造の解明は、アンソニー・アヴィーニやジョハナ・ブローダといった考古天文学者らによつていまや活発に推し進められている。一方で、都市を時間として捉える視座は、一部の研究を除くとあまり問題にされてこなかった。ベルクは「時間のなかの形」とは、端的には儀礼のプロセスであり、その遂行であると指摘している。（たとえば「学校」というものを考えてみれば、それは空間的には校舎や運動場や講堂などの複合体であり、時間的には入学から卒業までの一連の過程の遂行である。）都市を時間として捉えるということは、換言すれば都市というものをひとつのプロセスの遂行、反復として理解することである。こうして、都市がひとつの宇宙であり、宇宙というものが本来、時間と空間の統合（すなわち「時空」）として存立するのである以上、われわれもそれに応じた統合的アプローチを取る必要があるのではないか、というのが当初の問題意識であった。

こうして山本氏が指摘されている通り、拙稿は「象徴的空间構造への偏重に対する批判的考察として、象徴的時間構造解明に向けての問題提起」としての性格を持つものである。こうした関心に基づいて、まずメシーカ人の重要な神話である五つの太陽神話をもとに、彼らにとって時間としての都市はどのようなものであったかを考察した。そしてメシーカ人の都市が創造と破壊のプロセスの繰り返しとして理解されていたことを示した。これを受けて、本論はさらにこの創造と破壊のプロセスが実際に、いかなるあり方で行為され、遂行されていたかを問題にした。そしてこのプロセスが、行為の次元においてバシュラールのいう「籠もり」の営みを通して実現されていたことを、「新しい火の祭り」や征服時のモクテスマ王のエピソードから示した。

以上のように本論は都市の時間的形式、都市のプロセスとしてのあり方を明らかにしようとするものである。しかしながら今になって考えてみると、これは本論が課題としたことの半分に過ぎないことは明らかである。本論が志向しているのは、単にテノチティランの時間的構造を、その形

式のみに着目して描き出すといったことだけではない。むしろ狙いはその先のこと、すなわち、そこで明らかにされたプロセスとしての都市が、都市に与る人々によって実際にいかに濃密に生きられていたか、という事柄の理解である。もし都市のプロセスのみを解明し、提示することが目的であったならば、序に続く段落で、バシュラールの「籠もり」に関する議論を綿密に検討することもなかったであろう。にもかかわらずバシュラールが生命の根源的リズムとして、喚起的表現を用いながら提示する「籠もり」が本論において参照されたのは、それによって筆者はメシーカ人の時間経験の追体験と、彼らの宗教的実存への接近を目指したためである。（先の学校の例でいえば、入学から卒業までのプロセスを距離を置いて俯瞰することにとどまらず、むしろそこで主体たる学生なり教師なりが、いかにそのプロセスに参与したかを体験論的に理解するということ。学校をプロセスとして理解するだけでは不十分であり、入学時の新鮮な気分や運動会の興奮、卒業時の感極まる感じなどを追体験すること、共感的に理解すること。）

こうして本論の目的がなによりもメシーカ人の宗教的実存への接近であるということを、序などできちんと表明することを怠ったことを、筆者はいまさらながら強く反省している。評者は、「今回は議論の焦点が都市を生きる主体に対する分析にやや傾斜し過ぎたきらいがある」とこと、および、「征服時の「籠もり」についての考察が都市に生きる主体である王と住民による行動に重点が置かれ、生きられる客体としての都市自体に対する分析の焦点が絞りきれていない」ことを指摘されている。確かに本論はテノチティランの時間論的構造の解明を課題とするものであると筆者自身が述べており、そのようなものを期待されて読まれた方には、本論は細かい点を含めてあまり徹底した議論ではないように思われるに違いない。このような批判を招いてしまった理由は、繰り返せば、筆者の狙いがプロセスとしての都市を細かい点まで明解に描き出すということではなく、実際にそのプロセスが、時間としての都市が、いかに生きられていたかを理解することであったことによ来する。

以上、山本氏の質問にすべて答えることはできなかつたことをお詫びしておく。氏の批判によつて自らの研究スタイルに関して反省することができたことについて感謝しつつ、今後の研究に励みたい。